
このこのこ！～男の娘のこんな日常～

トミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「このこのこ～男の娘のこんな日常～

【著者名】

ノーノ

【あらすじ】

私立天翔学園高等学校　この学校に入学したのは、ゼンマイでもいるような男の娘！？

プロローグ 「主人公は××系」（前書き）

不定期更新になりますが。よろしくお願ひ致します。それじゃあ主人公のアカリちゃんヨロシク。

「僕の名前は、アカリじゃないです。えーっと、このセリフ読めばいいんですね。こほん、青春に必要なのは、「友情」「ラブコメ」

「男の娘」・・・って僕は男の娘じゃなーーい！！

プロローグ 「主人公は××系」

「用アカリさん好きですか？…付き合ってください…」

2011年 春 4月も終わりに近づき今年僕は、必死の受験勉強の結果無事合格した「私立天翔学園高等学校」の体育館裏に呼び出されて今までに告白された。

「無理です。」それを僕はソッコーで断る。

「…・・・・えつ？」

「それじゃあまた明日。」

僕は今告白断つた田中君（多分）の横を通り過ぎようとして「ちゅっちょ」と待つてください！」田中君（多分）に道を塞がれた。

「どうどうしてですか！？せめて理由いやつ少しでいいから考えてくれま」「無理です。本当に。」僕は、さつと告白を断つたときより早く返事をする。

「だからなんでも」

「落ち着いて、別にぼくは田中君のことを嫌つてないし嫌悪感すら持つてないよ。逆に友達になりましょうって言われたら嬉しくぐらいだし。」

「じゃあ友達以上にみえないってこと、後、田中じゃなくて田代です。」と田中君じゃなくて、ええと田代君だ。は冷静にソックリミをいれながら聞き返してきた。

「いや・・その・・なんといふか・・その、実は僕、この中の告白は中学生時代からなれている。しかし、理由の説明だけはどうして

もなれない。むしろ、ある意味なれたくない。

「いつ言わなくちゃダメかな?」むしろ、言いたくない。

「はーっ」田代君はきつぱり返事をした。

「僕はきちんと明確な理由で用さんを好きになりました。例えば・
・「田代君は頼んでもいないのに、僕の好きな理由をきちんと説明
していった。・・・はあ百パーセント理由行つた後の傷口広くなる
よなああますます言いたくないあ。

「例えば、円さんの透き通るようなソプラノ声は誰の心にも染み込んで心地よくて、・・・いやいや僕にとつてそれコンプレックスの一つなんだけど。

「そして月さんの髪は、まるで芸術品のようにサラサラで、」あ
今のは少し嬉しかったな、高いリラックスにはちみつ入れた特性リラックス
使つてるからね。これが結構髪にいいんだよね。

「せりん外見だけじゃないです」「またあるのかあ

「いやあ、あれは結構手抜き料理なんだけど。
「そして、このまえ僕の制服のボタンがとれた時のあの裁縫の腕前
はつきり言ってプロ級です。」裁縫にプロ級とかあるのかなあ？
「他にも・・・」「うん、分かった。分かったからもうやめて。」や
ばい、本当にいい図らくなつた。

「それじゃあ、お願ひします。わざととした理由を説明してくださ
い。」

「もう、嫌だ逃げ出したい。てゆーかそんなに僕のこと見てるなら理由にきずけよつ！別にその理由隠してないし、なんで逆にきずかないのー！？もお————本当に。これはもう腹をくくるしか無いのかー！」

「円さん、お願ひします。振られるのは仕方ないけれど、理由もなしに振られるのは嫌です。」田代君は、追い打ちをかけるように迫ってきた。いや、だからさ理由聞いて傷つくレベルがもう核爆弾並みなんだよ経験から。

「う、あ、あの、あの、こ、せ、」

「円さんー。」・・・むづ無理、この状況もむづ無理。

僕は腹をくへつた。

「田代君。」

「はい。」

「・・・僕苗字月明狩ないし、名前もアカリじゃないんだけど。」

「・・・えつ？」

「・・・僕の苗字が月明狩なんだ。」

「・・・すつすいません、いつ今までできずかなくて。」田代君が

慌ててあやまる。逆に謝りたいのこっちなんだけど。

「いやつ、こ、こ、よく間違われるじ。」本当に。

「そうなんですか？」

「そつそれで、本当の名前が、その、えつと。り、、、って書つた
だけだ。」

「えつ？すいません聞こえませんでした。」

「・・・」

「えつ？」

「りゆ、」

גָּדְעָן

「いは」

つきあかり

月明狩
竜人」

「…………！」田代君はようやく気がついてくれた。

そう、僕、月明狩 竜人が

男だと云ひと云。

第一話 「幼馴染は狼系」

2011年4月26日（火）

「ん―――っ・・・ふう。」僕は自室で大きく背伸びをした。
「や・て・と。」ピザと鳴った携帯のアラームを素早く止めて、
時間を確認した。

AM4時30分

「よし、時間ぴったり。」これは僕の癖で、アラームが鳴る1分
前には起きて背伸びなんかしたりして本格的に準備をしようと
ものだ。

そして、なんでこんなに早く起きるかと言つと僕には色々仕事がある。

「今日のお弁当はどうかなあ。」僕は鼻歌を歌いながら、寝
巻きの上からポンチョを着てつぶやいた。

「セイヤはもう少しお肉食べたいって言つてたけど・・・栄養バラ
ンスかんがえるとなあ。」

セイヤと言うのは僕の幼馴染でれつきとした女の子なんだけど・・・
まあ説明は後にして、やることやんなくちや！

「んーと、昨日はハンバーグだったから少し焼かなかつたあまりが
あるから。うん、ピーマンの肉詰めにでもするか。後他にも・・・
そんなことを考えながら、洗濯機のあるお風呂場にいく。

「その前に、洗濯物干さなくちゃ。」すぐに頭を昨日の天気予報に
切り替える。確か今日は晴れだったはず。一応テレビをつけて、
確認する。・・・うん合ひてた。

「お姉ちゃんは、またお風呂ぎに起きるんだよな〜〜冷めても美味

しこものって難しんだよな。」軽くため息を吐く。

／1

時間後)

「ふう。」僕は、あさの仕事を一通りかたづけてココアを飲んでいた。

「全く、セイヤはあれほど何回も注意してゐるのに下着を洗濯機に入れるんだから。」ぶつくさと文句言いながらココアを一口飲む。うん美味しい。

「僕だつて思春期の男子なのになあ。」本当は狙つてやつてるのかな？いやないか、そんなことしてもあまり意味ないしね。

「多分もう無意識のうちにやつてるんだろうな。」まあその理由もわからなくはない。ふと、窓ガラスに写つた自分の姿を見る。そこには、寝巻き姿の上にポンチヨを軽く羽織つた髪の長い綺麗な美少女がいた。

「…………てゆーか、僕なんだけどね。」はああああああああ 口に出すとなお落ち込む。

そう、僕「月明狩竜人」は見た目は完全に女の子だ。

この見た目のせいで、僕は大変な思いをしてきた。例えば、昨日の田代君のような例、あれが一番困る。なぜなら、A君と言つ人がいたとする。A君と僕は普通に仲良くしているとする。同性なんだから当たり前だろう？ それなのにA君は完全に僕のことを女の子だと思う。僕の通つている「天翔学園高等学校」略して、「テンガク」はそれなりにマナーを守つていれば私服登校OKなのだ。僕は数少

ない制服組みで、この見た目との相乗効果でさうに立つてしまう。しかし、この時代「ボーアッシュ」と言うような言葉もあるし、「ボクつ娘」と言つことばもある。簡単に言つてしまえば、僕を女子と勘違いするのは当たり前というものだ。しかし、自分のほうから「僕は男だからね。」と言つのもなんかプライドみたいなものが許さない。そんなこんなで僕は、週2のペースで告白されてしまう。・・・男子から。ちなみに、僕の幼馴染が僕のことを「アカリ」と呼ぶのでよく本名を「月^{つき}アカリ」と勘違いする人も多い。

「まあ、後数週間すれば僕が男だつてことが分かつてくるだろうな。経験からして。」僕は、ココアを飲みきつてかたずける。今の時間は5時38分まだ時間はある。

「さてとお風呂にでも入ろうと。」僕はお風呂場に向かった。僕は、お風呂が大好きだ。細かく説明すると髪を洗うのが好きだ。そのため、特性リングを作つたりして髪の手入れは欠かしたことがない。こうゆう所も、セイヤに女の子っぽいていわれるけど。好きなんだから、しようがないしようがない。

「ん～ん～ん～ん～ん～ん～」僕は服を脱ぎ始めながら鼻歌を口づさむ。そしてシャワーを浴び始めて、髪を洗おうとシャンプーに手をかけたとき・・・

「あつ」しまつた、着替えを忘れてしまつた。けど今脱いだ下着着るのもなあ。

「仕方ないか。」僕は、シャワーを止めて体と髪を軽く吹いてバスタオルを体に巻いて自分の部屋に戻つた。

ガチャツとドアを開けたとき、ふと違和感があつた。

「・・・・・ベットが乱れてる。」それだけじゃない、下着をしま

つているタンスが少し開いている。さらにベランダの窓が開きっぱなしだ。洗濯物を干したとき鍵を締め忘れていることはじつは多い、しかし学校に行く前わ必ず確認するので防犯に関しては大丈夫。だけど、窓を締め忘れるなんてありえない。そして決定的なのは・・・

「・・・は・・・あ・・・・はあ・・・・」

微かに聞こえる人の呼吸音しかもクローゼットから。

「・・・・・（ゴクリ）」僕は少し緊張しながらもクローゼットに手を掛け・・・思いつきり開けた。

そして・・・そこには・・・

「・・・・・」

「・・・・・何してんの・・・・・セイヤ」

「・・・・・ワン」

「・・・・・」状況整理中。シバラクオマチクダサイ・・・

目の前にいるのは「澄空星夜」^{すみぞらほしよ}俺の幼馴染で通称セイヤ 一人称は「アタシ」

少し赤みがかつたショートヘアで結構傷んでいる イメージとしては「犬系少女」というより「狼系少女」 胸はとても残念 セイヤの家は隣でベランダとベランダの間は1メートルも無いジャンプして渡れる距離だ しかもセイヤは成績と反比例するほどスポーツ万

能で「テンガク」にギリギリ合格したのも奇跡だと思つ
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
なもんかな。よしー!

「セイヤ

「・・・なつなにアカリ」

「いくつか質問していい」

ג' ע"ה ע"ג

「質問その一ベットが乱れてるけどなんで」僕は淡々と質問する。

「さつさあねえなんでだろうね！アハハハハ」セイヤはわざとらしく笑った プチツ

「そう・・・質問その2・・・僕の下着をしまってたタンスが少し開いてるんだ。それでさあその手に持つてるの何?」僕は続けて質する。

「あの・・・その・・・あ――――――いつのまに！」セイヤは大げさに僕の下着を見てリアクションを取る。ブチッ

「じゃあね最後の質問いい」僕は冷たい声でセイヤに聞く。

「なつなに」セイヤは怯えた声で返事をする。

そしてきつぱりと僕は言う。

「死ぬ前に何か言いたいことがある」

「・・・・・」セイヤは凍りついた。

「ああ、早く」自分でも信じられないほどの怒りを抑えるの難しいから早くして欲しい。

アカリ聞いてくれ。
分かつた。

「つーなつたな。」急に真面目になつたな、もつもしかしてわざ
とじやなくて何か理由があつたとか

「・・・・・アカリってやっぱり大事な所隠すと百パーセント
女の子だよな。」

「へつ！？・・・・あつ」今の自分はバスタオル姿と髪のことを忘れていた。

「いや――――――！ 眼福 眼福」

・ ブッチン

「えつ、今の音」「死ね」

——ツツこの変態才オカミ——

「一つ、僕は机の上の分厚い参考書を思いつきり叩きつけた。

「ワホー

第一話 「運命の少女は毒舌系」

2011年4月26日（火）

「すいませんでした……」セイヤが土下座している。

「知らない！！セイヤなんてもう知らない……」僕は、自分でも分かるぐらい目に涙を貯めて起こっていた。

・・・あっ、ちなみに土下座してるまつがヒロイン（一応）で怒ってるほうが主人公（一応）です。普通逆だと思しけれど、まあ色々あるんです。

AM7時03分

セイヤに一撃くらわせた後、さすがにやりすぎた…とは思わず。とりあえず僕の部屋にセイヤ改めこの犬っこころを置いておくとまた何かされそうなので、ロビングのソファに放置していた。それ約1時間後セイヤが復活した。

そして、第一声が「うーーん、よく寝た。さてアカリの部屋あさりに行くか。」んで、直後僕がいることに気がついて僕とのやり取りを思い出しつつ、冒頭のシーンにつながる。

「なんで起きたら僕の部屋をあさりに行くんだけよ…」

「本当にごめん！」

「知らないったら知らない！」

「とりあえず、お願ひだから朝ごはん作つて…」

「今言うことか―――つ―――！」

「だつて、アカリがアタシの分の朝ごはん作つてくれないんだもん

！」

「今そんな話してないでしょ、うー。」

「じゃあ、なんの話？」

「だ～か～ら～！～はあもうこ～せ。」怒り疲れでどうでもよくなってきた。

「じゃあ、朝」はん作ってくれる?」この犬つうのが。

「鄙として朝ごはん抜きーー。」

ここまで状況説明。。。朝から飼い犬のしつけをしています。

「クウン クウン」

「全く、なんであんないたずらするかな本物に。」

「撒旦」の名前を冠する魔術師の魔術

「スーサースー……あーあーよし戻った。アカリさ、一応ア

「だからなに。」

いやいやいや！だから……その……なんでそんなこと

「うーーんそういえば、じゃあなんで?」「えっ!!!」

卷之三

「えへ、じゃないでしょ。朝忙しい時にあんなことして、何か理由あるんでしょう？ ほら行つて『ご覧もう怒らないから』。」第一聞けと書つたのはセイヤのほうだ。

「ニヤ・・セの・・だから・・・あたしは・・・あんたが・・・すく
（ペペペペペペペ） なりな！」

携帯のアラームを止めて言ひ。

「えいやまだ理由言つてないし、着替えてないし、何より朝ijiはんは？」

「だからなによ。」

「ワオ——————ン」

「先行くよ。」

「ワンワンワーンワン」

「いつてきまーす。あつ鍵いつもの植木鉢のしたにあるから。きちんと戸締りよろしくね。」そう言い残し駆け足で家を出た。

「ワンワワニ」バタンさて急ぐか。

「テングガク」は大通りに出れば、直線で距離もそんなに無い。しかし、その大通りにでるには僕の家と「テングガク」の位置の関係上逆方向にそこそこの道を歩かないといけないのだ。そこで僕は・・・

「仕方ない、時間ないし「暗闇通り」を通るか。」暗闇通りと言うのは、学生などが遅刻しそうなときに使う裏道だ。ビルと雑木林に挟まれていて、いつも暗いのでその名が付いた。学校側はひつたりなのが多い・不審者が出るなどの理由で通ることを禁止しているが、背に腹は変えられないでの通りを使うことにした。

「ここが暗闇通りか確かに暗いな。」実は僕この暗闇通り使うのは初めてである。

「なんせいつもは、余裕をもって家から出るもんな。」ちなみにセイヤはいつもギリギリでこの暗闇通りの常連らしい。後、セイヤのご飯はいつもはきちんと作つてはある。

「飯抜きは少しひどかっただかな?」ふと、走りながらそんなことを考えていた。

「いやいや、あんぐりこ当然だよ全く。」あんないたずらするなんて。「やういえば、いたずらの理由なんだつたんだりうへ。」まあいいか。

そして暗闇通りを4分の3ほど通り過ぎたかなと考えていた頃。いきなり後ろから声をかけられた。

「おい！そこのねえちゃん！」・・・無視して走る。

「お前だよ、そこの中学生服のお前！」・・・はあ、分かっているけどやつぱり僕か。

「・・・なんですか。」動かしていた足をとめて後ろを振り向くと、どこにでもいるような。したつぱAみたいなおじさんがいた。「ちょっと、金貸してくんないかんあ。困つてんだよ。」うわあ、ひぐぐらい典型的なカツアゲのセリフだな。後、カツアゲするやつの性別ぐらいきちんと見極める。

「・・・残念ながら僕お弁当派なんで、購買用のお金すら持つて無いんですけど。」

「んじゃあ、手間が省けたな。」

「はっ？」

「金が無いんじゃしょうがねえ・・・体で払つてもらおうか。」パンとしたつぱAが指を鳴らすと雑木林から7人ほど似たような奴らが出てきた。そして最後に、がたいのでかいグラサンをかけたいかにも「一番強くて偉いですよ」オーラを出したボスみたいな人が出てきた。

「あ～～なるほど、そうゆうことですか。」

「そういうことだよ、ねえちゃん。物分かりいいじゃないか。」しつぱAに代わってボスっぽい人が口を開いた。

「そうですか。・・・つまりここに居る皆さん僕のストレス発散に付き合ってくれる。・・・そういうことですね。」僕は少し笑顔でいった。

「ククク・・・あつはつはつはつはつは」ボスっぽい人が笑い、それに続くよろこびとしたつぱたちも笑い出した。

「馬鹿かお前、恐怖で頭おかしくなったのか？」

「いえ、全然」

「あつ！・」少しキレた様子で声を上げる。

「第一僕は、結構頭の良い学校でそこそこ上位常連組なので頭は良いほうですよ。」

「そうゆうこといつてんじや・・・あくなるほど。」

「どうかしましたか？」

「残念だがその手にや乗らねーよ。お前俺様の直感だが格闘技かなんか出来るんだろう。

「ええつ・・まあ・・そこそこ」意外に鋭いなボスっぽい人。

実は僕父親が格闘家で一応基礎は小さい頃叩き込まれた。

「つまり、お前は複数対一人でもズブの素人の集団にやられるわけないと考えているんだな。」

「ええつと・・・近からず遠からずですかね。」

「残念だつたな、俺たちは素人じやねんだよ。俺たちは全員格闘技経験者だ。」

「あつそうですか。」そろそろボスっぽい人の説明あきたなあ。

「さらに教えてやるよ、俺の通り名を。」

「通り名？」そんなもんあんのか意外に強いのかもしれないなこのボスっぽい人。

「俺の通り名は『月の狩人』だ！」

「・・・・・・・・」

「どうだ驚いたか、あの伝説の不良は死んでなんかつたんだよ。」

ちなみに簡単に説明しておくと「月の狩人」と言うのは、2年前1年しか活動しなかったのにこの街の不良・ヤ・ザ・指名手配犯などの無法者達を問答無用で病院送りにし突然姿を消した死亡説もある伝説の不良だ。

「・・・・・」

「どうした、驚きすぎて声もでなくなつたか。」

「あの、言いすらうんですけど。」

「なんだ？」

「あなた「月の狩人」じゃないですよ。」

「なつなんだと！！」

「だつて・・・」

「そう、そのとつだ黒髪意外ブス女！」

「だつ誰だ。」うん、確かに誰だ今俺しゃべつてたし黒髪は認めるけど女じやねえし。それ以前に、とんでもないこと言わなかつたか？

そんなことは露知らずカツアゲグループに割り込んできたそいつは間髪いれずに話し続けた。

「いいか「月の狩人」はてめーみたいな××が小さい代わりに団体でかい　野郎じやなくてそこの黒髪意外ブス女より少し小さくてそこの黒髪意外ブス女の真逆の色でてめーみたいな　野郎の色の髪とは比べ物にならないほど綺麗な白髪で爪はてめーみたいな野郎の豚足とは比べ物にならないぐらいとても鋭く大きく美しんだよこの「ピ――――」で「ピ――――」な「ピ――――」分かつたら「ピ――――」しながらとつと帰れ「ピ――――」が

「……………」
・・・・・」 超沈黙

「うつうわー……………んーおか……………」

一ちゃあああんー」

「まつまつてください親分！ー！」 逃げ出すボスっぽい人&
あまや・したつぱ達

「……………」

ハツいけない俺もびっくりしそぎてフリーズしてた。改めて毒舌の人を観察する。内面の第一印象としては、「毒舌」意外なんにも無いが。見た目は、中性的なイケメン？で突き刺すような鋭い目付きで、髪はセイヤより少し長いから。セミロングとショートヘアの中間ぐらいで……そんなことを考えたら毒舌さん（仮名）が話しかけてきた。

「おい、黒髪。」

「なつなんですか？」

「テングク」つてどうちだ。」

「えっと……あつちです。」

「…………嘘付け俺はあつちから来んだ。」

「・・・・・ 本當です。」

卷之三

「そうかじやあな。」

一緒に遅刻して僕はセイヤが来るまでその場に立ち候へして、一緒に遅刻した日。

雲日陽射 くもりびひあこ というある意味運命で結ばれた女の子。

第二話 「転校生は知り合いで系」

2011年4月26日（火）

「んで、いりするといの公式に当てはまると言ひとだ。こコレス
ト出るからなー。」

きへんこへんかへんこへん

「うっし、授業終わり。解散、あーー腹減った。」男の数学教師は、
テキトーに終わりにしてクラスメイト達は昼ご飯のしたくをする。

ちなみに今は説明するまでもなく昼休み。

さてと、僕も昼ご飯にしようかな。

ダダダダダダダダダダダダ ガラガラバン 「アカリ、ごはん」犬
がやつてきた。

「澄空さん、何回言つたらわかるの。廊下は走らないの。」「
だつてだつて今日アカリ朝ごはん作ってくれないしも。」

「自業自得」

「うーーおかげで今日の抜き打ち小テスト1問も解んなかつたよ。
「いつものことでしょう、全く澄空さんは少しも勉強しないの?」
「うんー」この犬つじひか、元気に返事する場面じゃないだろう。

ちなみに僕とセイヤは1組と6組で離れているクラスなので、家に
いるとき意外は昼休みと帰り道しか一緒にはない。

「あとさあアカリ。」

「何?」

「その澄空さんってやめてくれない?」

「なんで?」

「なんでって、いつもはセイヤだから調子狂うし。なんか・・・」

・ムズムズするし。」

あーーそりこえぱきちんと説明してなかつたな。

「澄空さん耳貸して。」

「あひうん。」

（だつてセイヤつて呼ぶと色々噂が立つんだよ。）

（噂なにそれ?）

（僕とセイヤが付き合つてゐるつて噂。）

「えつ！アタシとアカリつて付き合つてたのー！」ズコッ 相変わらず理解力の浅い犬つてるだな。

「いや、そうじょなくついつまり、アカリがアタシを犬扱いするのも今朝の参考書アタックもそーゆうことをするまえの訓練いや調教！つまりアタシがアカリの本当の犬になつてワンワンする日いつか来るつてことつまり・・・・・・」

なんかセイヤがブツブツ言ひ出したりハアハアしだした。

「おーいセイヤ。」

「さらに・・・して・・・だから・・・」

「セイヤ！」「少し声を強めて呼ぶ。

「はつはい！第一希望は普通でアカリの部屋がいいです。」

「セイヤなんの話してんの?」

「いっいや・・その・・そつそついえば、アタシ達いつから付き合つてんの!?」はあ、やつぱり理解してなかつたか。

「付合つてなによ、そりやう噂が流れるから親しく呼ぶのは止め

てつて話でしょ、ハ。

「……………？」……………」
「……………？」……………」

きた。

「やうなの。」「ぼくせわへぱつぱつ」

てなんで機嫌が悪くなるんだろう。

「ハイハイ、ご飯ね。」

「そういえばアカリ、「暗闇通り」でなんでボーツとしてたの?」「別に理由なんてないよ。しいて言うならなにか忘れ物ないかな、とか考えてただけだよ。」そっけなく返す。

「嘘でしょう。ダメだよ嘘ついちゃ。」あつさり見抜かれる。

「相変わらずの、野性の勘だな。」 ここは、嘘を見破ることに専
じめらが神の感だ。

「ではもはや初(

「…教えな！」

「ごめんね。一だつて、不良に絡まれて

を追つ拵つてその上この学校のこと聞かれてその女の子がきた方向

だと言つたら疑われて・・・なんて言いたくない。

るだ。あまり人に聞かれたくないところは、野生の勘ですぐ気がつ

くから深く追求してこない。

「お詫び、今夜は好きなもん作つてやるよ。」

「本当！ それじゃ 唐揚げ食べたい。」 相変わらず肉食系だな。

ノルマ

そんな何気ない会話をしていたとき言った次のセイヤの話は僕の体

温を3。ほどしくした。

「そりいえば、うちのクラスにね転校生が来たんだ。」

卷之三

「どうしたのアカリ？滝みたいに汗かきはじめで。」

……いや……なんでもない……」おれがね、そんなわけな

۱۰

そこでそれで、転校してきたのがやんこくがここに
つてどうしたの！？机にうつ伏して！大丈夫？！」

「…女…の…子…」
「…女…の…子…」
「…女…の…子…」

「うううんそれでね、その転校生アタシたちよ

「うんそれでね、その転校生アタシたちより遅くこでね3時間
めぐらに来んだ。なんでも道に迷つたらしくって、でも「テンガ
ク」は大通りににめんしてから普通迷わないはずなのにね・・・つ
てどうしたの！？固まって、今にも崩れ出しそうな状態になつて！
・・・いいから・・・続けて・・・信じない、僕は絶対信じな

「でつでね、その子の言つた自己紹介の最後の言葉がよくわからな
いの。」すごく嫌な予感がする。

「ダウ」

——ツツ——」

間違いない毒舌さんだ！

「いきなり大声上げてどうしたの？」ナニ ドーシタ ケンカカ

ガヤガヤ
ワイワイ

ほらつ周りの人たちもいるし。落ち着いて。

セイヤー！！

卷之三

卷之三

「えつなんで？」

「なんでも、わかつたら返事！！早く！！じゃないと晩ご飯野菜炒

8

卷之三

九

そうだよ、仮に毒舌さんが同じ学校にいようが同じ学年にいようがセイヤと同じクラスにいようが関わらなければ万事解決じゃないか。きちんとセイヤにも注意したし、第一セイヤと毒舌さんのクラスは6組僕のクラスは1組合同の移動授業でも一緒になることなんてないし、めったなことがない限り毒舌さんと会うわけなんてない。

「そうだよ。僕が気にしすぎなんだ。

「・・・あの・・アカリ・・ちょっといい?」

「ん? なに?」

「その……言いにくいくんだけどね……だからね……あの――

なんだよと聞い語のよじりした。』

「フリーな星夜遅くなつて。」

セイヤがビクウとなつて聞き覚えのある声が聞こえた。

「いやー、この購買以外に人気あんのな、おかげで前にいる邪魔な

やつらのせいで遅くなっちゃったぜって……」

「…………」

すんごく目が合つた……

「おおっ！？今朝の黒髪……つーかさ、てめーなんで星夜と一緒にいんだ？」

「それは、こっちのセリフです。」冷静にカウンターシグナルをいれる。

「ん？俺か、いやーー実はな……」

まとめるとこうだ

両親の都合で、変な時期に転校となってしまいしかも大遅刻。てんぱつてしまつてどうすればいいかわからなくなつてしまいを毒を吐いて全員ドン引きしかしセイヤだけは変わらず（意味がわからず）普通に話しかけてくれて友情成立と……

「これであつてる？」

「ああ、あつてるぜ。」

「…………」僕はゆづくつとセイヤのほうを向ぐ。

「い、いやーーす」いねアカリ簡単にまとめちゃうなんてさすが学年順位上位常連組ほんとにすげ「晩御飯野菜炒め決定！！」

「ワオ――――」バタン セイヤ ノックダウン

そうだよ、忘れてた。この犬っこ、人と仲良くなることについて嘘を見抜くことより得意（無意識）なんだつた。こいつ3時間め

と4時間田の中に仲良くなりやがつた。

「なるほどお前が星夜の言つてた幼馴染か・・・なんか女っぽいな。男の娘つてやつか」さらりと氣にしていること言いやがつた。

「僕は男の娘じゃないです！！」

「なんだよやけに警戒心むき出しだな、俺なんかしたか？」

「今朝のこと覚えてないの！..」

「えつと・・・」

「僕に対して「黒髪以外ブス女」って言つたー」

「あ〜言つたな」

「この・・・いい加減に！」

「ゴメン」

僕の怒りが爆発しそうになつたとき毒舌くんは深く頭を下げてあやまつた。

「・・・えつ？」予想外の行動でフリーズする。

「本当にゴメン、あの場合その場に居た全員に毒吐かないと効果薄くなつちゃうんだ。仕方なく言つたとはいえ、本当にゴメンなさい。」

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・わかつたよ。もう

いいから頭上げて。」

「でも・・・」

「いいから」毒舌くんは頭をゆっくり上げた。その顔はとても反省していた。

「もういいよ、僕も少し熱くなりすぎた。それに助けるために毒吐いたんでしょ？思つてたほど悪い人じやないし。」変な人だけど「そうか、ありがとう。・・・それじゃあ改めまして暁日陽射くもりびひなしだだ。ヒザシと呼んでくれ。」ヒザシは笑顔で差し伸べた。

「うん、よろしくヒザシさん。僕は月明狩竜人つきあかりりゆうと」僕はヒザシと握手

をした。

「ああ、よろしくアカリ。」

「アカリじゃないです！」

これがクラスメイトがいる中で、すんごく恥ずかしいやり取りをしたヒザシさんとの、きちんとした出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675z/>

このこのこ！～男の娘のこんな日常～

2011年12月26日20時49分発行